フルブライト留学生

五十五年前の昔といえば昭和の時代である。昭和三十三年七月（千九百五十八年）横浜桟橋から氷川丸に乗ってアメリカへ渡ったのは雨宮一郎が高校二年生の時だった。九月が新学期というアメリカ式に合わせての留学であった。フルブライト奨学金制度によって全国から選抜された一般人を合わせた百数十人がアメリカの大学での指導を受けるために北米航路で渡米した。敗戦国日本にとって夢のような話である。往復旅費及び生活費、授業料を含めた全額支給制度は、当時の上院議員フルブライト氏が交換留学制度を提唱し将来性のある世界の若者にアメリカ文化を授けようという大きな目的で実行された。雨宮は大学入学資格検定に合格、一年間の高校留年を覚悟して学校からの推薦を待った。無論、推薦には並々ならぬ条件が伴う。高校二年間の成績や素行、周囲の人物評、家族構成にまで及んだ。

全国から集まった留学生は多士済々（さいさい）で男子がほとんどであり女子はわずかに三名である。大学生は無論のこと教職に付いている人や公務員、１年間休職した企業人も参加している。喜びに浮かれている暇もなく文部省主催で壮行会やらアメリカ生活でのレクチャー並びに研修会も行なわれた。職員が言うには、兎に角ぶっつけ本番の体験が大事でそれを味わってきて欲しいという理由から、あわただしく一行は船上の人となった。二十一日間の船旅でシアトルへ入港、あとは全米各地へ散ばるだけである。と言っても南部は避けた留学だった。南部地方は人種差別が依然根強くて白人と黒人がトラブルを起こすケースが多く、わざわざ世界から勉学にやってきた若人達を巻き込ませたくない合衆国の配慮だったとあとで聞いた。雨宮はカルフルニア州立バークレー校という歴史ある大学の大学寮へ荷を解いた。寄宿舎へは二名の男子日本人高校生が入学したのである。二人一部屋の寮には関西から来た高丸仁という同年齢高校生と同室であったが彼は無口な方のタイプで滅多に会話が生まれなかった。東京出身の雨宮はどちらかといえば、学校では生徒会に精を出して

いて学内のみならず他の学校との連携など面識のない人達と接する経験を積んでいたから余り人見知りをしたことは無かった。高丸との自己紹介で判明したことは彼が京都出身の高校生ということと教師家庭に育ったことであった。男ばかりの三人兄弟の次男で高校では社研（社会研究会）にも所属していて、その勉強をアメリカでも続けたいと希望を語った。言葉は少ない方であるが教室での英語授業も難なくこなしているのを見た。ただ、難点は好んで社交をしようという意志が見えなかったことである。何時も一人で行動していて他人を寄せ付けない、仲間を作らない、群れを作らない、などの雰囲気を強く感じた。それらは留学生に多く見られるアメリカ文化への戸惑いと英会話が通じないもどかしさから来るものと始めのうち雨宮は思ったが、次第にそうでないことがわかった。単に彼の性格だったことが。折角、留学の与えられたチャンスを生かして多くの人と友情を結びたいと考えていた雨宮とは対照的の彼の孤独癖（こどくへき）と思える性格に仕方なく別の部屋の社会人と交流を結んでいった。休日に郊外に遊んでも高丸は雨宮達の遊山には一向興味がないらしく誘っても出向くことはなかった。変わり者という陰口が留学生仲間から囁かれ始めた。部屋に閉じこもっているのかと云うとそうでもない、一人で時々外出する姿を目撃した。外出先を教えるようなことも無い。二晩三晩と部屋を空けることもあった。外泊する場合、寄宿舎を監督する舎監の許可を得ることは当然だったが雨宮は人の行動まで知りたいという余裕はなかった。或る時、突然、ターザンの真似をして雨宮を驚かした。上半身裸になりアアーアーと奇妙な声を出してひとりほくそ笑んだ。（ボクはターザン映画が好きでジョニーワイズミラーがいいね・・・）それが高丸の趣味らしき一面の断面を語った唯一である。又、或る日には（差別という問題に大いに関心があるんだ、アメリカでは肌の色でヒドイ差別があるが京都にも似たような差別問題があって、それを勉強したいと考えているんだよ、自分の国の差別問題は避けて通れないからね、結婚も就職も、その差別がある限り、満足な人権を確保する生活は無理なんだ、京都は日本の都として千年の歴史があるが、それだけに身分制度が厳然（げん）として未だに暗々裏に残っている、同和問題なんだ、士農工商穢（え）

多非人の出自がある、自分はアメリカで黒人の奴隷制度を勉強したいと思っている、それを参考にして法律家として役に立ちたいんだ、司法試験に合格して弁護士になりたいのさ）と静かな口調で語った。その眼差しは熱く鋭いものがあった。雨宮の家庭は父親が裁判書記官で単身での地方赴任が多かったから高丸の将来への夢の話は彼を刺激した。しかし、差別問題とは雨宮は考えてもいない出来事だった。都会育ちの彼は普段、差別などを感じたことがなかったから高丸から持ち出されたこの問題に内心、戸惑いを覚えた。と、同時に雨宮自身、己の幼稚さに後ろ指を指された感じがした。同年齢の彼が社会的関心を持って問題提起していることとの落差だ。雨宮は英会話に翻弄される毎日で朝起きてから寝るまで英語、英語の連続にお手上げ状況、授業に追い付け、追い付けで精一杯だったからである。しかし、高丸は、そんな悩みを一向に感じさせない様子だった。雨宮はただ彼の篤い思いに相槌を打つしかなかった。変わり者と陰口を利いていた自分が恥ずかしく思うのと共に或る嫉妬を感じた。ヤツは凄い！と。

コンパという留学生を加えた大学の親睦会もしばしば開かれて三ヵ月も経つと異国人同士の交流も盛んになった。だが、高丸はその茶話会にも現れることはなかった。一年の留学期間が目前に迫った頃、高丸の姿が見えなくなった。彼は黒人問題に顔を突っ込み過ぎて騒動を起こしたらしいという噂が流れた。白人専用のバスに乗り込んで白人の過激グループから、すんでのところで殺される事件を起こしたのだという。白人の若者から突然ナイフで切り付けられ片耳を切り落とされたことに腹立ち、逆にその若者のナイフを取り上げて彼を刺してしまったという傷害事件であった。屈強な警察官が何人も雨宮と高丸が住む大学寮にやって来たから事件は事実だったのだろう。病院へは見舞いにもいけなかった。地元警察がストップを掛けていた。正当防衛か否かの論争が留学生たちの間に起きた。しかし、大学からの要請があって騒動は直ぐに鎮静した。フルブライト財団からか或いは日本領事館からの要望に由ったのかも知れない。優秀だっただけに、その才能を惜しむ声もある一方、郷に入ったら郷に従え、を履き違えた若者特有の正義感が禍した、という結

論が日本人留学仲間に広まる。雨宮には、差別問題を熱っぽく語った時の高丸の張り詰めた真剣な眼差しが忘られなかった。性格は性格として同部屋の人間だから何か手助けが出来なかったかという悔いもあったが。

留学生の中には希望して二年目を迎える人もいたが、雨宮は横浜港へ凱旋帰国した。四年間の高校生活を終え大学、大学院と進んで司法試験に合格した。父親と同じ司法の道を歩む。地方裁判所、高等裁判所の判事で各地を転々とした生活である。六十五歳で定年、七十歳には瑞宝章を授かった。下級裁判官でありながら父親を越えた栄光であった。退官後は直ぐに大手企業役員に招聘されている。割と順調な人生だった。が、七十二歳の時に高校の同期生だった妻が他界する。司法試験に受かる青年時代、OLとして彼を支えてくれた糟糠の家内だ。彼にとって大きな打撃だった。子供を授からなかった夫婦は六十代に入ってからよく旅行を楽しんだ。ヨーロッパは無論のこと、東南アジアのリゾート地や世界一周の船旅へも出かけた。であるから、クモ膜下出血での突然死は、どうにもやり切れなかった。右腕右足を捥ぎ取られた様な喪失感だった。しかし、運命は得てしてこんな風であると諦めの気持も兆す、裁判の中で不運の人生を辿った人々を何人も見てきたゆえである。

そんな時だった。フルブライト留学生時代からの友人が励ましの電話があったのは。彼もずっと以前に奥さんを亡くしている。今ではジャーナリストとして多少は名の知られた人になっている。彼と一献すれば留学生時代の話題が持ち上がるのには当然だった。フルブライターを標榜する彼は、各界で活躍している人脈を伝手（つて）に様々な論説記事を発表していた。社会の先頭に立つフルブライト留学生達の軌跡。そんな感慨に耽っていると雨宮は同室だった高丸仁のことを、ふと、思い出した。それとなく彼のことへ話題を振ると彼も傷害事件を起こした高丸に興味があるように見えたが消息は不明と言う。京都へ行って調べるか財団で調べれば分かるだろうぐらいだった。成功しないものには興味を示さない保守的なジャーナリストである。鰥夫（やもめ）暮らしの無聊（ぶりょう）を慰め合いながらお互いの健康を案じ再会を約して二人は別れた。

雨宮が四国遍路の旅に出たのは秋の十月のことであった。六十代で高松高裁に任官した折、季節を問わずに八十八ヵ所を歩く札所巡りに興味を持ったからだ。庶民はこうして旅を楽しんでいる、という深い感慨だった。地方新聞から伝わる俳人達の動向も興味を引いた。無粋であった人生にせめて文芸趣味をと、俳句を齧り始めた彼は、種田山頭火、尾崎方哉の二人の自由律俳人の生き様をなぞってみたくなったのである。さらには、歌舞伎役者八世市川団蔵が四国遍路を終えて小豆島へ渡り大阪へ帰る船中から入水した事件も記憶の中に強く残っていた。様々な歴史を刻んでいる四国遍路、季節の頃合いである十月を選んだのは歩く旅には最適であると思ったからだ。無論、お隣さんへは暫くの留守を話して了解を得ていた。昔、夫婦で瀬戸内海クルーズで旅行したことはあったが、太平洋側の高知県は疎い土地だった。黒潮が洗う足摺岬、野猿が現れるという大堂海岸、四万十川の清流、予備知識を頭へ叩き込んでいると、それらは彼の意欲を促した。成るべくなら全行程を歩き通したいが七十二歳の齢では無理だろう、ハイヤーを借り切って廻る豪の者もいるらしいが、それでは味気ない、せめて無理のない歩行で無事、遍路旅を終わりたいという願望だった。

四国遍路は一番札所、徳島県霊山寺から出発する。団体のバスツアーもあれば個人での遍路もいる。歩くだけの遍路であれば、早い人で四十日、普通は五十日前後になるらしい。宿泊は寺の宿坊や門前にある遍路宿を利用する。無論、旅館やユースホステルなどもあるから心配はいらない。

雨宮は無理をして途中で止めるような破目にになってはならないと慎重に歩き始めた。地位や肩書き、略歴も取れた一介の高齢者が歩き旅をしているという意識である。朝七に宿を出る。正午ごろには次の宿へ入る、疲れたときは二日間の休みを取る、という按配だ。たっぷりした休養を得て次へ進む。マッサージ師がいることを聞けば足腰への手当てを施したりした。両足に肉刺が出たぐらいで身体の調子は好かった。山道へ差し掛かると紅葉が始まっていた。以前なら公用車から眺める景色だったが、こうして大地を踏みしめる一歩一歩のせいで景色すら見事に目に飛び込んで来た。

何日目だったろうか、徳島県での最後の二十三札所番薬王寺から高知県の最初の札所である二十四番最御崎寺への長い道程の途中で、雨宮は一人の不思議な人物と会った。車も人も通らない国道を、晴天だというのにフードをすっぽり被ってトボトボと歩く異様な恰好な男、反対車線の端と端を雨宮と前後しながら歩いている。旅連れの誼で思い切って声を掛けてみた。(こんにちは!・・・お遍路さんですか?・・・)しかし、相手からは何の反応も無かった。もう一度叫ぶように問い掛ける。しかし相手からは何の反応も無かった。耳が不自由なのだろうか、無視されたことで雨宮は言葉を掛けたことを後悔した。安っぽい接近は禁物であるという寡っての職業意識が甦った。黙って歩くに限ると思い直した。雨宮と前後して歩いていた彼は何時の間にか雨宮の視界から消えていた。ゆっくりのように見えた歩きははるかに健脚だった。午後三時、室戸岬の山頂の第二十四番札所最御崎寺に到着した。七百メートルに及ぶ登山道は難儀だった。その夜は寺の宿坊へ泊まる。夜は何故かまんじりとして寝付かれなかった。全身が火照っていた。

翌朝、下山、雨のため室戸市のホテルへ入って身体を休める。漁港の近くのホテルの一室から窓のカーテン越しに表を見ていると、突然、道中で遭った例の異様な男が眼に映った。彼は傘を差して背にリュックを負うている。雨宮は朝食を摂ろうとフロントへ出る。ついでに(珍しいですね、高知にもホームレスさんらしい人がいるとは・・・)そう面白おかしく話しかけるとパートらしい受け付けの中年の婦人が(ああっ、ターザンさん・・・時々、奇声を発するから、人はクルクルじゃあないかと思うんです)と頭の上で右手をグルグルした。(でもあの人は英語がしゃべれるんですよ、観光で来る外国人の応対には持って来いでしてね、地元の漁協やホテルの人達からは重宝がられて・・・でも、いつ頃からかなあー、若い女の人に代わられてしまって・・・それからかなんでしょう、ここを離れて札所巡りを始めたのは・・・いまじゃあ、乞食遍路みたいになっちゃったんです・・・時々、思い出したようにウチへも来ますよ。・・・以前の颯爽とした姿は見る影もありませんけれど・・・)

聞いていた雨宮の頭に直ぐひらめいたものは、高丸のことだった。

急速に浮び上がる五十五年前のバークレー校時代の思い出、ターザンが好きだと言った高丸、アアーアーの奇妙な叫び声、まさか、まさか、彼ではないだろうという漠然と広がる疑問。彼を追ってみよう、掴まえて素性を確かめたい、そんな気持に襲われた。フードで覆い隠した上半身も気になる、ひょっとして切り落とされた傷害の耳跡ではないか。

ターザンさんは室戸では知られた存在だった。大衆食堂で、漁協組合で、町の子供等などが知っていた。だが、誰も本名を知らなかった。まして彼の履歴などは分かる筈がない。

雨宮は次々に難所の霊場を打ちながら愛媛県に入った。旧土佐街道は寡ってけもの道と呼ばれた急峻な坂の連なりである。雨宮は修行者ぐらいしか通らない、その間道を歩き通した。

松山市のホテルでゆっくり荷を解いた時である。ロビーでこの地方の新聞を広げていると【八十八ヵ所霊場巡り外伝・・ターザンさんの順打ちの話】の見出しで囲み記事が掲載されている。(何処の誰とも知らないが、ターザンさんの愛称で八十八ヵ所を歩き続ける老人がいる。英会話が堪能で時には巡礼する外国人とも仲良しになるらしい。子供達に英語を教えることもある。アメリカ生まれだろうか、誰もターザンさんの素性を知らないが遍路には沢山の奇特者がいるものだ。・・・)

雨宮はその記事に目を留めながら、ターザンさんの愛称である人物が、高丸仁である確信を持った。しかし、なぜ、こうまでの境遇になったのか、想像を超える軌跡を知りたい誘惑に駆られた。落剥の人生ともいえるみすぼらしい姿ではないか、あの栄光に彩られたフルブライト留学の青春時代から、傷害事件を起こした後の彼の動向を、どうしても知りたかった。

しかし、彼を知ることは容易ではなかった。どこをどう歩き続けているのか皆目見当が付かなかった。もし彼が高丸であれば彼の方でも四国霊場巡りに、昔、アメリカへ留学した同室の雨宮がいるなどとは夢にも思っていない筈だろうと考えた。

彼は新聞社へ出向いた。退官後の名刺を出して、囲み記事を書いた社会部の担当記者と面談した。アメリカへ渡った仔細を話す。膝

を乗り出した中年記者は、早速四国各地に張り巡らした通信網へ連絡を取ってくれた。ターザンさんなる人物が今、どこにいるのか探し出して欲しい、と。

しかし、彼の消息は杳(よう)として分からなかった。第八十八番札所大窪寺から小豆島へ渡り三ヶ月近い日数を要して雨宮は東京へ帰って来た。静謐な遍路道から戻って喧騒の都会を眺めると、妙に抵抗があった。便利さや効率の良さなどは任官中は快適に感じたものだったが歳を取った今ではクソ喰らえ、だと思うばかりに変化している。この心境の変わり身はなんであろうか。

或る日、電話が掛かって来た。四国新聞の例の担当記者からであった。ターザンさんに接触できたのだと言う。雨宮のことは黙っていて英語が話せることや彼の略歴をしつっこく聞いても何も言うことは無いの一点張りだったそうだ。しかし、記者はそこに何か隠されているものを感じ取った。記者魂に火を点けられて彼を追いかける作業に入っている報告だった。雨宮は、電話口で無言で聞くだけだった。果たして高丸仁だろうか、人違いではないだろうか、あの優秀だった高丸仁の来し方が、あのように落ちぶれていることはあるまいという、微かな憶測、それを直ぐに打ち消す雨宮の胸中の波紋、夜、床に入ってから雨宮は五十五年前のバークレー校の思い出を記憶から洗い出していた。

梅が咲き始めた三月の或る日、雨宮は自宅のファックスで一通の紙片を受け取った。四国霊場巡りの番外でターザンさんの囲みを書いた四国新聞担当記者からである。彼の素性が漸く分かったという。早朝、今治市の路上で車に引っ掛けられた。相手は酒酔い運転の若者で意識不明の重体、集中治療室に入院している、警察周りの若手記者がターザンさんであることを知り同僚の先輩記者へ報告を上げてくれた経緯(いきさつ)らしい。その際に警察が持ち物であるリュックを点検したところ、底に分厚いノートが入っていた。ページを開くと、始めにこの人物の本名、出自、学歴、が記されていた。本名は高丸仁、住所不定、家族無し、結婚歴無し、職業も無しの記載があった。

それを読みながら雨宮は、彼が自らの人生を消し去っていたことを直感した。それは高丸の矜持であろうか。傷害事件を起こしたあ

と、彼が京都の実家とどんな関係になったか、同和問題に携わると公言していた彼が、その後どのような道を歩んだか、四国へ来たのは何故なのか、様々な疑問が湧く。が、意識不明の今では所詮、それもせん無いことに思われる。ノートには様々な書き込みがあって特に食べ物の記帳が多かったと紙片は伝えている。唯一の楽しみは食べることだったのか、という遣る瀬無さである。あの高い志しはどこへ行ってしまったのだろうか、どこでどう高丸は変節してしまったのだろうか・・・

夜明け、雨宮は夢を見ることが多くなった。浅い眠りの時がほとんどである。

裁判の夢が多い。数々の法廷に得体の知れない人物が突然、現われる。判決を言い渡してから、間違っていなかったか、自責に苛(さいな)まれることがしばしばである。被告席の恨めしい眼差しが中央の席から一点になって雨宮をめがけてくる。冤罪ではないか、裁判官に齟齬がなかったか、夢とも現(うつつ)ともつかぬ闇の中で彼は煩悶する。高丸の姿が現われる。怜悧な鋭い眼差しが雨宮に迫る、彼は沢山の憤(いきどお)りを背負っているんだな、と思いながら小水のために起き上がった。

玄関の脇に手洗いがある。真冬のひんやりした空気が廊下まで忍び寄っていた。ぞっくとした悪寒が身体中に走る。尿を催そうとした時だった。胸に焼け付く痛みが来た。爆発するような頭痛が兆して意識が遠のいていく。前のめりにつんのめると壁に全身がぶち当たる。両手が空を切るのが分かった。ああっ、ダメかも知れない、刹那(せつな)、そんな意識が流れる。呆気ない、まったく呆気ない人生だった、オレは死ぬ、声にならない意識が口の中を漂う。水洗の水の音がゴーツと音立てて流れる。二十秒して流れの音は止んだ。

こうして彼の生涯が終わった瞬間だった。